CA1
EA947
B71
#60 May 1985
DOCS

# カナダ

特集・夏のカナダ

1985年5月
No.60
ISSN 0389－1852

Dept. of External Affairs
Min. des Affaires extérieures
OTTAWA
4 1985
RETURN TO DEPARTMENTAL LIBRARY
RETOURNER A LA BIBLIOTHEQUE DU MINISTERE

トピックス――2

夏のカナダ●平山真人――4
忘れられぬ北極の一夏●岩下莞爾――6
ロッキーの野外キャンプ●谷川哲夫――7
夏のカナダ旅行――9

ケベック市で米加首脳会談――10
リニアモーター式軽量快速電車――11
石油・天然ガスの価格を自由化――11
バンクーバー博まであと1年――12
カナダ便り/ニューファンドランド島の特異な言語情況●丸田忠雄――13
カナダの首相③ウィルフリッド・ローリエ●ジョン・セイウェル――14
各地の新聞から――16
編集後記――16

60984 81800
LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030040 1

Bulletin Canada 発行 カナダ大使館

# トピックス

## ◆クラーク外相がソ連訪問
## ◆軍備管理、貿易などで協議

クラーク外務大臣が、三月三十日から四月七日までソ連を訪問、グロムイコ外相、アルヒポフ第一副首相らと会談したほか、極地科学研究所、科学アカデミー・シベリア支部などで両国共通の関心事について意見を交わした。

Andrew Vaughan

グロムイコ外相との会談では、文化・科学・教育面での公式交流の再開、軍備管理、人権、貿易といった問題が話し合われた。

軍事問題では、クラーク外相は弾道ミサイル防御（ＢＭＤ）システムに関するソ連の動きにかんがみ、カナダは他のＮＡＴＯ諸国とともに米国のＢＭＤシステム（戦略防衛構想＝ＳＤＩ）研究を支持する、と述べた。またカナダ北方で米国が行なっている巡航ミサイル実験について、クラーク外相は実験中のミサイルには弾頭をつけていないと説明するとともに、カナダは核兵器開発の能力をもちながらその方向に進まなかった数少ない国のひとつである、と強調した。

クラーク外相がソ連における人権問題や不満分子の取り扱いに関するカナダの懸念を表明したことに対し、グロムイコ外相は国内問題だとして取り合わなかった。

軍備と人権問題では合意に達しなかったが、両外相とも貿易と交流計画については二国間接触の増大が有用であることを認めた。

アルヒポフ第一副首相との会談では、同副首相が来年期限切れとなるカナダとの小麦購入協定（八二年締結）を更新するというソ連の意向を伝えた。

そのほか、クラーク外相は、酸性雨に関する合同シンポジウムを来年開催しようというソ連の提案に同意した。

## ◆カナダの消防飛行艇が活躍
## ◆ガラパゴス諸島の山火事

珍らしい動植物で知られるガラパゴス諸島イラベラ島の山火事は、四月中旬、七週間ぶりにようやく鎮火したが、これにはカナダの消防飛行艇が大きな役割を果たした。

消火活動に参加したのは二機。近くのバルトラ島から一日百五十回も往復、一機当リ四百万トンもの海水を火災現場に散布した。さしもの火事も、エクアドル陸軍特殊部隊が掘った延長七十キロ余リの防火溝と空からの海水散布、それに雨に助けられて、無事鎮火した。

どういう消防飛行艇が使われたか明らかでないが、カナダは森林火災に備えて、ＣＬ―215多用途水陸両用機（カナデア社製、写真）など優秀な消防飛行艇を開発・生産している。

## ◆中国に石油技術で協力

カナダは三月末、中国と石油開発技術協力プロジェクト（総額六百三十万ドル）に関する取決めに調印した。

プロジェクトは、中国石油産業省が北京近郊で進めている二つの油田開発の計画・実行能力を高めるのが目的で、ワックス含有量の多い原油の回収率を高めるための油田エネルギー節約システムと、凝縮石油と天然ガスの回収率を高めるためのエンジニアリング・システムを開発する二つのフィージビリティ調査が行なわれる。合意の中にはまた、四十二人の中国人専門家を訓練することも入っている。

## ◆日加研究賞に筑波大グループ

昨年十二月に設立が発表された日加研究賞の第一回受賞者に、筑波大学社会工学系の佐藤英夫教授のグループが決まった。研究テーマは「日加経済関係の構造」。

日加研究賞は、カナダ政府がカナダまたは日加関係についてオリジナルな研究を実施しようとする日本の大学または研究機関に与えるもので、賞金額は出版費を含めて最高五万ドル。

## ◆トヨタの部品工場が完成
## ◆アルミホイールを生産

カナダ政府やブリティッシュ・コロンビア州政府の誘致を受けて八三年春に設立された、トヨタ自動車の全額出資子会社「カナディアン・オートパーツ・トヨタ」のアルミホイール工場がこのほど完成、四月一日、現地で開所式が行なわれた。

ＢＣ州バンクーバー近郊のティルバリー工業団地に建設されたこの工場は、約六万平方メートルの敷地に四千八百平方メートルの建て屋。従業員は当初二十五人で、月間二万本のアルミホイールを生産することになっている。

製品の七五パーセントは日本に輸出して北米向けの自動車に装備し、残りはカナダ国内や米国で補修部品などとして利用する。

開所式には、トヨタの豊田英二会長、豊田章一郎社長、カナダ政府のスティブンズ地域産業振興大臣、ＢＣ州のベネット首相らが参加した。

## ◆平岩東電会長に第一号
## ◆カナダ原子力協会の国際賞

東京電力の平岩外四会長が、このほど、カナダ原子力協会から「国際賞」を授与された。これは、ウラン開発や電力会社など、百七十の団体でつくるカナダ原子力協会が世界の原子力産業の振興に寄与し、同時にカナダの原子力産業に貢献した人を表彰するため、同協会設立二十五周年を記念して創設した賞で、平岩氏は受賞第一号。

日本は原子力発電用天然ウランの三〇パーセント、東京電力の場合はその七五パーセントをカナダに依存しており、平岩氏の受賞は同氏の電力開発への貢献とともに東電のカナダからの長期的なウラン輸入が認められたもの。

## ◆安全なシートベルト
## ◆オタワの企業が研究

カナダでは、二州（プリンス・エドワード・アイランドとアルバータ）を除く全国で、運転手にシートベルトの着用が義務づけられているが、シートベルトをつけても運転手や乗客が死亡あるいは負

傷しないとは限らない。ハンドルに頭をぶつけたり、シートベルトで胸部や腹部を傷つけたりすることがあるからだ。

バイオキネティックス・アンド・アソシエイツ社（オタワ）は、自動車事故によるこうした怪我を防止あるいは軽減する器具やシステムの開発・テストを専門にしている。

例えば衝突時の頭と胴体へのショックを計れるようにしたゴムと金属性のダミー（人形）を作り、さまざまな速度でバリアーにぶつけてみる。ダミーの頭（アルミ製）の部分に手術で用いる石膏を塗り、衝突のさい頭の骨がどう破損するかをテストする。衝突時のシートベルトからの圧迫度を計るダミー用の胸部も開発した。

こうしたダミーを使って得たデータは、もっと安全なシートベルトや車内インテリアの設計に利用される。

## ◆◆有人宇宙基地計画に参加
## ◆カナダ、修繕棟などを検討

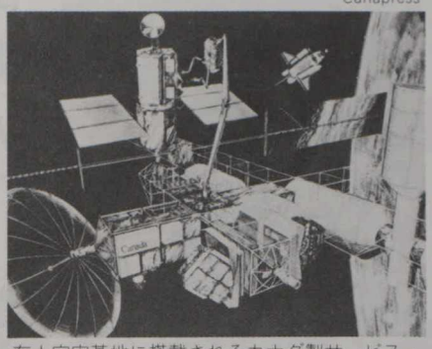
カナダは、一九九〇年代初めに米国が打ち上げを予定している有人宇宙基地計画に参加することになった。

有人宇宙基地計画は、実験施設、観測所、製造工場、営繕・貯蔵室、航行中の衛星や衛星基地補繕のためのサービス・テスト棟、宇宙飛行士用居住区、他の衛星や基地との連絡のための移動用衛星などを備えた超大型宇宙船を打ち上げようというもの。宇宙の開拓・利用を進めるベース・キャンプとなる。

カナダの参加は、三月中旬、シドン科学技術大臣が明らかにしたあと、米加首脳会談で確認され、ボン・サミット（先進国首脳会議）でも、欧州宇宙機関（ESA）加盟諸国および日本とともに米国への協力が合意された。

カナダは、すでに一九八二年一月に始まった同計画の第一段階（各国の参加に関する可能性調査や各国の技術評価）から、日本などとともに加わっている。今年四月から八七年三月までの第二段階では、参加各国の分担内容をさらに詳しく検討することになっている。

Canapress



有人宇宙基地に搭載されるカナダ製サービス・テスト棟の想像図。

カナダの分担については、NRC（科学技術事業団）が検討するが、衛星その他の軌道宇宙船の修繕や部品交換に使われるサービス・テスト棟や、太陽熱電池羽根、レーダーサット（資源探査衛星）などが考えられている。

## ◆◆あらゆる差別を禁止
## ◆憲法の平等条項が発効

カナダで、人種や皮膚の色、宗教だけでなく、性別、年齢、精神的・身体的障害に基づく一切の差別が禁じられることになった。

これは、三年前に公布された憲法の第一章「権利と自由に関するカナダ憲章」のうち、法整備のため施行が延期されていた第十五条「平等権」が効力を発したためで、ある有力紙は「カナダ法に新しい時代が開かれた」と大きく報じている。

第十五条の施行とともに、少数民族や囚人、女性から〝差別〟訴訟が起こされているが、今後は強制的な定年退職、年金の男女差、等価値労働に対する男女同一賃金、身体障害者にとって不便な建物や道路……といった問題が、法廷で争われるものと思われる。

## ◆◆動物図案の金・銀貨を発行
## ◆国立公園の制定百周年記念

カナダの国立公園制定百周年を記念して、カナディアン・ミント（造幣局）はこのほど、大自然の中に生きる動物をあしらったデザインの百ドル金貨と一ドル銀貨を発行した。

百ドル金貨には、崖の上に立つオオツノヒツジが、一ドル銀貨には、湖畔に立つアメリカヘラジカが描かれている。両方とも、表のデザインは元首・エリザベス女王の横顔。

100ドル金貨　1ドル銀貨

百ドル金貨は重さ約十七グラム。価格は九万円。一ドル銀貨は重さ約二十三・三グラムで、未使用貨が三千三百円、鏡面仕上げのプルーフ貨が四千七百円。

両貨とも日本での販売は、泰星スタンプ・コイン（〒一〇四東京都中央区京橋一丁目一九―八大野ビル、電話〇三―五六二―〇七一一）が取扱う。

## ◆◆「涙を流すだけではだめ」
## ◆スター歌手たちが援助の歌

カナダを代表するレコーディング・アーチスト五十二人が、エチオピアで飢餓に苦しむ人々を救援するための歌をつくった。

ジュノー賞に輝やくブライアン・アダムズとジム・バランスが作詞、今年六つのグラミー賞候補に選ばれたデビッド・フォスターが作曲したのを、ゴードン・ライトフット、バートン・カミングス、アン・マレー、ジョニ・ミッチェル、ダン・ヒル、ニール・ヤングといった九人のスター歌手が、一節づつ代わる代わる歌うもので、題して「涙を流すだけではだめ」（ティアズ・アー・ノット・イナフ）。レコードの収益（予想額一千万ドル）は、すべて救援費として使われる。

## ◆◆バンクーバー交響楽団
## ◆六月に日本各地で公演

カナダ三大オーケストラのひとつで、〝活気にあふれ、かつ叙情豊か〟（「ザ・ニューヨーカー」）と評されたバンクーバー交響楽団（VSO、指揮秋山和慶氏）が、六月に来日、東京、横浜などの各地のほか、つくば博の会場近くで公演することになった。同交響楽団の日本演奏は、一九七四年以来。

今回の日本公演では、秋山氏の指揮で、ブラームス、R・シュトラウス、ラベル、マーラーなどの作品が演奏される。

秋山和慶氏

公演予定は次の通り。

◎六月十六日午後七時　筑波ノバホール（新治郡桜村）
◎十八日午後七時　東京文化会館
◎十九日午後六時四十五分　静岡市民文化会館
◎二十日午後六時半　岐阜市民会館
◎二十一日午後六時半　沼津市民文化センター
◎二十二日午後六時半　神奈川県民ホール
◎二十三日午後二時　調布グリーンホール
◎二十五日午後七時　大阪市・シンフォニーホール
◎二十六日午後七時　明石市民会館
◎二十七日午後六時半　和歌山県民文化会館

# 夏のカナダ

時事通信トロント支局
平山真人

カナダの夏。それは突然やって来る。大げさに言えば「鬱」から「躁」への一段跳びであり、静から動への転換でもある。恋人との短い逢瀬を惜しむかのように、カナダ人は夏の太陽と緑を心ゆくまで楽しむ。夏こそはカナダがその本領を発揮する季節である。

と、いささか仰々しい書き出しになったのは、カナダ人の夏への待望感が極めて強いからだ。その辺のところを知ってもらうために、少しカナダの春について語らねばならない。

毎年四月最後の土曜日で、カナダは冬時間から夏時間に変わる。時計の針を一時間早めるだけだが、この一時間の効果は大きい。それまで日没が午後七時過ぎだったのが八時まで延び、サラリーマンの一日の仕事が終わる五時でも陽はまだ高い。こうなると、仕事帰りに買物でもしようか、それとも早目に帰って家庭サービスをしようか、などと考え始める。この時期が夏への序章、つまり春ということになる。

ところが、梅や桜が春の到来を告げる日本と違って、カナダの春はどうも色彩感に欠ける。庭や公園の芝の青さを感じ取れるのは、シーズンを心待ちにしているゴルフ・ファンぐらい。木々の芽も頑固につぼみを開こうとしないし、油断していると雪まで降ってくる。知り合いの雑貨屋の店主は、「春は雪が降るものと観念した方がいい。一九七五年だったか、五月に大雪が降ってね。ナイヤガラ周辺のリンゴ園が大被害を受けたこともある」と、平然としている。

「冬来たりなば春遠からじ」はカナダに通用しない。解放されるべき春が、往生際の悪い冬にいびられている、というのが正直な印象だ。だからこそ、カナダ人は「春よ来い来い」ではなく「夏よ来い来い、早く来い」という気分になるわけだ。

面白いのは、長い冬の反動だろうか、いったん楓の芽が吹き出し、街が一面に黄緑色のもやをかぶったような景観を見せ始めたら、あとは早い。木々はみるみるうちに繁り、芝生はあっという間に緑のジュータンに変化する。冬の間、うす汚れて見えたレンガ造りの家並みが、緑の色添えだけで高級住宅街に様変わりするから不思議だ。これが五月中旬から六月末までの一か月余。カナダの夏が突然やって来ると感ずるのは、このためだ。

せっかくやって来た夏だが、その期間は短い。カナダでは、九月第一月曜日の「レーバー・デー」休日で夏に別れを告げる。だからこそ、カナダ人は夏を有効に過ごそうとシャカリキになる。とくに夏休みは冬の間から計画を練る。

筆者などは、仕事の性格もあって、長期休暇は望み得べくもない。せいぜい一週間が限度だ。カナダに赴任した当初は、「カナダ人は大して働かないくせに休暇は十分とって、いいご身分だ」と、羨望とやっかみ半々の気分になったものだ。順番待ちの長い行列が出来ているのに窓口の係員が少ない郵便局、仕事がたまっていても五時になればサッサと帰るOL…どう見ても勤勉とは思えない。彼らでも最低二週間は休暇をとる。

ある友人に聞いたら、「(オンタリオ)州の法律で最低二週間の休暇を保障しているのさ」という答えが返ってきた。了解。そういえば、連邦議会も七月中旬から九月中旬まで夏期休会となり、カナダの政治は冬眠ならぬ夏眠に入る。ニュースを追う筆者たちが苦労する、〝夏枯れ〟現象も起こる。

友人のカナダ人記者は、『赤毛のアン』で有名なプリンス・エドワード・アイランドに別荘を持っていて、毎夏、家族と一緒に最低一か月は休養するという。筆者ならば、ゴルフ三昧をしたとしても、一か月以上もたないだろう。別荘で何をしているのかというと、特別のことはない。普段目を通せない本を読んだり、散歩したりで、悠々自適の休暇だという。ありとあらゆる名所・旧跡を駆けずり回らないと気の済まない筆者とは、まるで違った過ごし方だ。

味が評判のジャーマン・ベイカリー(パン屋)の店主も、例外ではない。毎年、

七月末になると、「九月〇〇日までは休暇のため閉店します」という貼り紙を出す。お得意さんは、閉店の前に大量のパンを注文し、冷凍庫にごっそり貯えておくということにあいなる。ことほど左様に、カナダ人の夏期休暇はゆとりがある。

中産階級以上になると、休暇の〝受け皿〟がある。別荘である。幸い、「銀座通り」まで出現してアンノン族でごった返す日本の軽井沢などと違って、別荘地はそれこそ掃いて捨てるほどある。周知のとおり、カナダは森と湖の国。湖の数を聞かれて、正確に答えられるカナダ人はまずいない。小さな湖まで含めると、一説では数百万とも言われるが、とにかく数え切れないというのが正直なところ。大きな世界地図でも見てもらえば一目瞭然だ。カナダ人が見向きもしない湖でも、日本へ持って行ったらちょっとした観光名所になること間違いなしだ。こうした無数の湖畔に別荘がある。オンタリオ州のジョージアン・ベイ東岸などは、いわばメッカ。その一つムスコカ地域は「コテージ・カントリー」という異名をとっており、天気予報などでは「コテージ・カントリーは時々晴…」などとやっている。

休暇ならずとも、週末になるとボートを屋根に乗せて、車で北へ向かう光景をよく見かける。湖で泳ぐのもよし、釣りをするのもよし。家族水入らずの、ゆったりとした休暇を過ごすのが典型的だ。

別荘がないからと悲観することはない。キャンプ・サイトも完備している。一、二週間キャンピング・カーをレンタルし、大量の食糧を買い込んで湖畔のキャンピング・サイトで飽きるまで〝停泊〟。次はあの湖、その次は……などという〝はしごキャンプ〟とて可能だ。

ただ、湖が無数にある割には、大都市から近い別荘地は水際がほぼプライベート・プロパティ（個人所有地）になっていて、気軽に入り込むことはできない。別荘だからこそプライバシーを確保しようというわけで、湖畔の休暇を楽しみたい〝外来者〟は、少々遠出する必要がある。

夏は子供たちの季節でもある。新学期が始まる九月までの間、宿題からも解放されて、大いに羽を伸ばせる貴重な時期だ。ポピュラーなのがキャンプ。夏休み中のいわば集団合宿で、私立学校が企画したものから、コミュニティー、スポーツ業界のものまでいろいろあり、子供の好みと予算を考えつつ選べる。北の湖での「カヌー・キャンプ」、ロッジを利用した「テニス・キャンプ」、〝通学〟ができる「デー・キャンプ」……どのキャンプに入るかをめぐって家族会議をやることも。長いものになると一か月間というのもある。料金は千ドル近くなるので決して安くはないが、健康管理からキャンプの企画まで全て主催者側に任せられるから、親にとっては便利だ。子供がキャンプに参加している間、夫婦だけで長期旅行を楽しめるというメリットもある。

子供にとっても、友達づくりにはもってこいで、新学期へ向けた足ならしにもなる。それに、集団生活体験とスポーツの習得が加われば、夏休みも充実したものになる。

アルバイトも子供たちの夏に欠かせない。夏に限ったことではないが、カナダ人はよく自分の子供に家の仕事を手伝わせる。筆者が行きつけの八百屋では、週末になると、小学生ぐらいの女の子がレジで客の買物の袋詰めをしたり、野菜、果物の運搬でまめに働いており、決していやな顔をしない。むしろ両親に交じって働くのが得意そうである。

よく見かけるのがアイスクリーム売り。アイスクリームが入った冷凍庫を自転車式の押し車で人の集まりそうな公園などへ運んで行っては、チリンチリン鈴を鳴らしながら、「アイスクリームはいかが」と黄色い声を張り上げている。変わったのでは、車洗いのアルバイトもある。沿

道にグループでバケツと雑巾を手に持ち、「CAR WASH」の看板を揺らせながら、行き交う車を誘っている。一回三ドル程度で、普通の洗車より割安にしているところがミソ。

ゴルフ場のボール拾いはカナダならではか。ゴルファーが球をなくしそうな池や林で球を探し出しては、「三個で一ドルだけど、いらない？」と声をかけてくる。OB常習プレヤーには、悪くない買い物となる。

アルバイトで思い出したが、カナダでは夏になると、「ガレージ・セール」なるものが出現する。引っ越しなどで家財道具を処分する際、いらなくなった物を家のガレージに並べて売りさばくもの。庭の芝生の上で店開きすれば、「ローン・セール」とも呼ばれる。街角に「ガレージ・セール」の看板を立て、本、カーペット、衣服、家具、自転車、食器……と並べ、客（通行人）が来るのを待つ。値決めは客との交渉次第で、何が何でも売るというより、「欲しいものがあったらどうぞ」という、いたってのんきな、いわば〝素人ノミの市〟。財政に余裕のない新婚夫婦などは、まめに「ガレージ・セール」を見て回れば、掘り出し物に出会うこともある。

さて、夏の代表スポーツ、ゴルフに触れないと片手落ちになる。国土の広いカナダのこと、ゴルフ場もプライベートからパブリックまで数多ければ、ゴルフ・ファン層も中学生から老人まで幅広い。なによりも手軽なのがよい。本格派には物足りないが、パブリック・コースならば、たいがい車で三十分の圏内にある。料金はほぼ十ドル前後だから、ざっと日本の十分の一。学生やシニア（六十五歳以上）なら半額に割引きされる。加えて、早朝や夕方はこれまた割引き料金ときているから、利用者本位の娯楽施設とみた方が適当だろう。

早朝組はシニアの常連が多い。気の合った仲間、あるいは夫婦で朝の散歩代わりにプレーを楽しんでいる。もちろん、日本のようにキャディーはいないから、自分でバッグを乗せたプル・カートを引きながらの、のんびりプレー。スコアよりも会話と緑を楽しむことに目的があるかのようだ。

子供たちも主婦もマイペースのプレーで、こうした風景を見ていると、ゴルフ場というよりは公園にいる錯覚を覚える。この気楽さは、ゴルフが特別なスポーツではなく、カナダの夏の生活の一コマにすぎないことの証左だろう。

夏の朝は芝刈り機のうなり声で目を覚ます。冬の間雪をかぶっていた分、芝生の成長が早く、緑も鮮やかだ。一週間も放っておくと庭は草ぼうぼうとなる。芝生の敵、タンポポ退治と芝刈りは冬の雪かきと同様、亭主族の週末の仕事になる。芝を刈ったあとの甘い香りがただよう中、スプリンクラーの水滴で色濃くなった青芝の上をリスが跳び回れば、カナダの夏の絵は完成する。長い夏の夜は、家族団らんにもってこいだ。

# 忘れられぬ北極の一夏

岩下 莞爾

北米の最北端、北極海諸島最大の島、エルズミア島を初めて訪れたのは一九七四年である。それ以来、何度この島にでかけただろうか。

あるとき、極寒のなかで用を足していると、何か気配がする。ハッとして見構えると、なんと十数羽の北極兎である。兎に取り囲まれているのである。前足を上げ、耳をピンと立て物珍らしく気にこちらを見ている。中には手が届くほどに近づいてくるやつもいる。人間を信じ切った態度である。というより怖い人間を知らないのであろう。

翌年、私はあの人を信じ切ったような目をした兎が忘れられなくなって、夏のエルズミアを訪れた。北緯八十二度のレイク・ハーゼンにである。

レイク・ハーゼンは地球上の謎といわれる不凍湖である。川が凍り、海が凍結しているというのに、この湖だけは凍らない。それに、ここは動物のサンクチュアリでもあると教えられていた。

そこは、まさに人を信じ切った動物の宝庫であった。群れなす兎が、まのあたりまで近づき、やや用心深げではあるが、子連れの十数頭のマスクオックスやジャコウウシの一団が近づいて来る。一面緑という訳にはいかないが、赤茶けた大地に、赤、白、黄の名も知らぬ小さな花が咲いていた。

突然、鋭い嘴で鳥に襲われた、名は知らないが頭が黒く、腹は白、羽は紫がかり、尾の先が二つに分かれた、鴨よりはやや小さな鳥だった。数羽が空を舞い、一羽づつ急降下して来て私の頭を突っつく。かなり痛い。何か獲物と間違えているのだろう。

昨今の話を聞くと、このレイク・ハーゼンにも夏の間、ツアーが入って来るという。それはそれでいいことだと思うが、飛行機がひんぱんに離着し、コッテージでは四六時中、大きな発電機が唸りを立てている。兎も遠のき、マスクオックスも遙か小高い山の上から下りてこようとしないという。

（日本テレビ チーフ・プロデューサー）

# ロッキーの野外キャンプ

金沢青少年教育センター代表　谷川哲夫

小学六年生から成人までの会員を対象に行なわれる金沢青少年教育センター（KYEC）の野外教育は、国の内外を問わず、自然の中での共同生活を通して自立心と社会性を育て、そこに生きる人々の生活に触れ、異質な文化を理解することによって、平和にしかもたくましく生きることを目的としている。この点でカナダは最も適する国と考え、一九七九年夏の三週間の下見に始まり、翌八〇年、そして八三年と、延べ三十四名がロッキーを中心にキャンプを行なった。今年の夏は、三回目のキャンプを予定している。

以下は、八三年七月二十七日から八月十三日までの、第二回キャンプの体験報告である。

## フォレスト・ローズキャンプ場

バンクーバーからBC鉄道で北へ十四時間、峡谷美を堪能しながら着いたプリンス・ジョージは、広々した木材の町だ。レンタカー二台で、二百キロほど南にあるゴールドラッシュ時代に栄えた史跡バーカービルに向かった。容赦なく照りつける真夏の陽は暑いが、風はとても爽やかだ。

ビクトリア出身のカナダ青年も含めて中高生、大学生、大人の混成グループ十二名は、ウイリアムズ・クリークの辺りの小さなキャンプ場にテントを張る。プリンス・ジョージで購入したパン、チーズ、ハム、野菜、果物をテーブルに並べ、払っても払ってもまといつくブラックフライに悩まされながら夕食の仕度が始まった。

給水場の大型手押しポンプを持て余している婦人にお手伝いを申し出て、感謝される。夜更けると満天の星、昼とはうって変わってひどく冷える。寝袋から目だけ覗かせて、徹夜でスターウォッチングするのだという高校生二人を河原に残して、引上げた。キャンピングカーやモーターホームの人々は、すでに寝静まっていた。

## パードン湖畔のピクニック・グラウンド

国道16号イエローヘッド・ハイウエーから少し入ったパードン湖畔は、日曜の午後とて、近隣の家族連れがおしゃべり、食事、ヨットやボート、水浴びなどを楽しんでいる。

レンジャーから、他の人々が帰ってからテントを建てること、明朝八時までに撤収することを約束の上で特別の許可を得て、唯一空いていたピクニック・テーブルを占領させていただく。ファイア・プレースは鉄製の回転式で、風向きによって炊口を変えられるという便利さだ。薪の使用は自由。胸に〝神風〟と書いたTシャツを着た日本びいきの青年が話しかける。ほろ酔いでご機嫌の婦人が、明日ヨットに招待下さるという。私は何人かをさそってやぶに入り、ラズベリーを摘む。夜遅く、遠くから、泳ぎの水音に混じって人声が聞こえてくる。

## ロブソンのゲストランチ

ハイウエー近くの小さな町で見つけた私設の野生動物博物館を見学した。ロッキーの様々な動物――クマ、ムース、エルク、シープ、ポーキュパインなどが、剝製で展示されていて興味深かった。真正面に堂々と立ちはだかるロッキーの最高峰マウント・ロブソン（三九五四メートル）に向かって走る。

牧場で、オランダ系の色白の女主人コクレーンさんが、私たちの到着をにこやかに迎えて下さった。今日はシャワーつ

きのバンガロー生活だ。ご主人自ら屋外の炉で焼いている肉の塊を横目に、芝生の上でくつろぐ。ほのかに木の香が漂う食堂の、特大のガラス窓から暮れていくロブソン山を眺めながら、とりどりの食卓に満足した。台所ではアルバイトの女子学生たちが、かいがいしく働いている。蜜を求めて絶え間なくハチドリが飛んでくる。

牧場の外れに熊が来ているという声に急いで駆けつけたら、熊の方で驚いて、後をふりかえりながら森に消えてしまった。

## エンペラー・フォールズのキャンプ場

ロブソン直下、ロッキー最大の滝へテントを担いで一泊のハイキングだ。ロブソン川のあたりのトレール・ヘッドで駐車して、まずキニー湖へ。湖までは緩かな登りで、道端には日本の山でもよく見かける草花、茸が多い。えぞ松に似たスプルース・バルサムにまとわりついている薄緑色のサルオガゼが見事だが、木にとっては大敵だ。

ラズベリーを摘んでは口にする。キニー湖の入口のキャンプ場は、現在〝リハビリテーション〟のため休養中だった。湖の水が道にまで溢れ、半ばから折れた立木が山道を塞いでいて、冬の厳しさを物語っている。可隣なコロンバイン、アルパイン・ファイアウッド、インディアン・ペイント・ブラッシュの赤い花が、緑を背景に映える。河原のワタスゲが、疲れを癒してくれた。

クリークにかかる板橋、渓流の吊橋を渡って急な登りを終えると、忽然とエンペラー・フォールズが目の前に現われ、飛沫をあげて轟いている。

その僅か上流にやっと見つけたキャンプ場は、道の側に数か所のテント場と丸木造りのトイレ、何かの動物に三分の一かじられた〝火気厳禁〟の立札、食料を野生動物から遠ざけて空中にぶら下げて置く簡単な設備のベアプルーフしか無い、簡素なものだ。

トレール・ヘッドから八時間の登りだった。小雨の中で、ロブソンにこだまする雷鳴を聞きながらテントを張る。白く濁って手を切る冷たさの川の水を汲んでつくったホットチョコレートで、やっと生気をよみがえらせた。ここまで来るとほとんど人に会わない。今晩の利用者は私たちだけらしい。

明けて午前中は、さらに奥のバーグ湖まで小一時間のハイキング。マーモットが岩に見え隠れしていた。バーグ湖の河原からは、ミスト氷河、バーグ氷河が手にとるように近い。ロブソンの頂はガスの中だった。風が強く、セーターにヤッケでも寒くて、とてもじっとしていられない。山慣れしている感じの若い夫婦が、しっかりした足どりでやって来る。夫の背には山ほどの荷物。母親の背でニコニコしている幼児に、ハーイ！と手を振って挨拶した。

突然、爆音がこだまして、ヘリが飛来した。さすがロッキーのレンジャーは巡回も大がかりである。笑いそうになる膝を励ましながら、ランチに帰着したのは六時。どうにか夕食に間に合った。

## 設備の整ったワピティ・キャンプ場

ジャスパー国立公園の入口のゲートで、車一台二ドル也の入園料を支払う。四日間有効のシールに合わせて、〝あなたは今、ベアカントリーにいます〟の注意書も手渡された。

ジャスパーは登山姿の客も多い明かるい雰囲気の町だ。ハイウエー93号とアサバスカ川に狭まれた林のワピティ・キャンプ場は、アルファベットのAからYのセクションに分かれ、ざっと数えて三百四、五十か所で駐車キャンプができる。温水の洗面所が八、調理棟四、給水薪置場が十九、電話三、シャワー棟一、おまけに野外劇場つきである。

各々のセクションは車で連絡ができ、歩き回って草木を痛めないよう歩道もある。鉄製の大型ゴミ箱は重々しい蓋でカバーされていた。食料は必ず車のトランクにしまっておく、夜十一時以後は必要最小限の物音しか許されない。最長滞在期間は十四日間、チェックアウトは午前十一時――などと書かれた印刷物が登録所で渡される。因みに、二台のセダンが支払った利用料は二十三ドルだった。薪は大きいので、斧が必要だ。お隣りのキャンパーにお願いしたら、快く貸してくれた。お礼に和紙の折り鶴を差し上げたら、大喜びだった。

ここを基地に、エンジェルが翼を広げた姿の氷河で有名なエディスカベルまでドライブした。氷河跡のがれきは背丈十センチばかりの木々が育っていて、数千年後にはこの辺りも森林になるという。氷河湖に浮かんでいる氷の破片が、陽にキラキラと反射していた。

一日、ラフト・ツアー（ゴムボートの川下り）、買物（とても品物が豊富だ）、コインランドリーでの洗濯、などで過ごす。

## アイスフィールド・パークウェー

険しい山々、数々の湖、川、氷河を縫って続く道は、まさにその名にふさわしく、自然の雄大さを楽しませてくれる。ジャスパー、バンフ両国立公園の境界にあるサンワプタ峠は、標高二千メートル余。ここのキャンプ場は、規模が小さく、料理場とトイレしかない。アサバスカ氷河の上をおそるおそる歩いて、ポッカリ空いたコバルトブルーのクレバスを覗いたりしてから、テント場へ着く。雪上車で氷河見物も可能だ。テント場では、早々とウィスキー・ジャックの異名をもつ鳥や地リス、マーモットたちの歓迎だ。

カルガリーからはるばる自転車で来たのだという青年は、木陰で読書をしている。午後四時、まだ陽はかなり高いので、裏山へ登ってみることにした。ここから眺めるアサバスカ氷河は抜群だ。記念にと、マウンテン・ゴートの糞を拾っている者もいる。カナダのグラウス（雷鳥）は、日本とはいささか形態が異なっているようだった。広大なメドウから見下ろすと、はるかかなたの道路を豆つぶのように車が往き交っていた。

## レイク・ルイーズからバンフのキャンプ場へ

期待していたビッグホーン・シープやムースは見当らなかったが、時折り岩から岩へ軽々と跳躍するマウンテン・ゴートが目にとまった。やがてロッキーの真珠レイク・ルイーズに到着。

さすが世界の観光地だけあって、駐車場もいっぱい。ホテルの花園には、色とりどりの花が咲き揃い、まさに楽園だった。紺碧の空を背景に、ビクトリア氷河が湖面にその雄姿を映す。早朝には、湖畔の道を、サイクリングやジョギングにひと汗流す姿も見られるはずだ。

バンフの町を通過して、高台にあるトンネル・マウンテン・キャンプ場へ。ワピティ同様、諸設備が完備している。グラウンドが固いので、テントを草地に移動したら、所定の位置に戻すよう勧告され、恥かしい思いをした。

こうしてロッキーでの二週間近くのキャンプ生活は終わり、さまざまな想い出を胸に、バンクーバー行き列車の客となった。

## 夏のカナダ旅行

カナダの夏は、厳しい冬と打って変わったように温暖。ブリティッシュ・コロンビアは十五、六度から二十四・五度としのぎやすく、トロントやケベックではマイアミより暑くなることがあるほど。北方でさえ、期間は短いが、二十度をこす。

この快適なシーズンに、多くのカナダ人は長い休暇をとる。そしてキャンプにでかけたり、湖のほとりの山荘でくつろぐ。トロントなどの大都市では、人口が半減するほどだ。

夏はまた祭りとイベントの季節でもある。夏のイベントは野外で開かれることが多く、人々は北国独特の長い夏の夜をさもいとおしそうに遅くまで楽しむ。

数ある夏のイベントのうち、いくつかをご紹介しよう。

◎北米最大の野外ショー、カルガリー・スタンピード（アルバータ州カルガリー）

毎年七月、十日間にわたって開かれる西部の祭り。幌馬車競争、荒馬乗り、荒牛乗りなどの競技のほか、カウボーイやカウガール、インディアンによる壮大なパレード、バンド、競馬、花火、サーカス、展示会などがある。

◎ゴールドラッシュの昔をしのぶクロンダイク・デーズ（アルバータ州エドモントン）

七月末ともなれば、街中がゴールドラッシュで賑わった十九世紀に様変わりする。市民は当時の派手な衣装を身にまとい、正午にはパレードのバンドや馬車の行進が街を行く。路上ダンス、砂金とりコンテスト、いかだ乗りレースなどが見物。

◎路上がステージになるモントリオール・ジャズ・フェスティバル（モントリオール）

毎年八百人をこえるミュージシャンが世界中から集まって、連日、朝から晩までのジャズ演奏を楽しむ。

野外コンサートあり、屋内コンサートあり。ディキシーランド、ブルース、レゲエ、ジャズ、ロックと、集まる人の多様さと同じく、ありとあらゆる種類のジャズが聴ける。六月末から七月始め。

◎シャーロットタウン・サマー・フェスティバル（プリンス・エドワード・アイランド州シャーロットタウン）

六月中旬から八月末にかけて、コンフェデレーション・センターでの「赤毛のアン」ミュージカルを中心に、市内の多くの劇場で、連日、劇やショーがくり広げられる。博物館や記念館、美術館も、一斉に催しを企画する。

### スポーツとイベントの季節

# 米加首脳、ケベック市で会談

## 自由貿易の推進、酸性雨対策を協議

Peter Bregg

ケベック市の空港で握手を交わすマルルーニー首相とレーガン大統領。うしろはミラ（マルルーニー）夫人とナンシー夫人。

マルルーニー首相とレーガン米大統領が、三月十七、十八の両日、ケベック・シティで会談し、貿易、酸性雨、防衛、軍縮などについて話し合ったほか、北米防空システムの近代化、太平洋沿岸におけるサケの管理など、事前に両国間で合意されたいくつかの協定に調印した。レーガン大統領が、外国を公式訪問するのは、第二期就任以来、これが初めて。

自動車や工場から排出される二酸化硫黄によって生ずる酸性雨は、カナダの森林や湖に大きな脅威となっており、その対策はこれまで米加間の懸案事項となっていたが、両首脳はカナダ側からウイリアム・デービス前オンタリオ州首相、米側からドゥリュー・ルイス前運輸長官を任命して共通の解決案を探らせることになった。二人の任務は、酸性雨の汚染源に関する法律についての協議、研究調査の協力推進、科学情報の交換を促進する方法の研究など。

デービス、ルイス両代表は、調査の結果を、一年後、それぞれの政府に報告することになっている。

### 貿易障害の除去

貿易については、マルルーニー首相とレーガン大統領は保護主義の防止、障壁の解消、両国間におけるモノとサービスの貿易促進を盛り込んだ宣言を発表するとともに、ウイリアム・ブロック米通商代表とカナダのジェームズ・ケレハー国際貿易大臣に「現存する貿易障壁を解消・撤廃するあらゆる方法を探る二国間のメカニズム」の設立を準備させることになった、と述べた。

これに加えて、両国は今後一年間に、次のような具体的な問題に対処することになった。

◎政府の調達および融資に関する自国企業並み待遇

◎モノとサービスの貿易を促進するため、諸規制の整理統合および簡素化

◎航空会社間の競争を阻害する要因解消のための、米加航空輸送協定の改正

◎エネルギー分野における規制の緩和

◎関税障壁の緩和

◎両国間の商用旅行の簡易化

◎ハイテク製品貿易における障壁の撤廃

◎偽造品取引やその他の著作権法および特許法乱用から知的財産権を保護するための協力

両首脳はまた、米加貿易の摩擦要因をいくつか解決した、と発表した。そのひとつは、昨年米国が貿易・関税法を制定し、すべての鋼管に原産国名を明記するよう義務づけたことについて、大統領はカナダに悪影響がないようにするため、法的措置をとることに同意したこと。またカナダ側は、米国の観光資料を連邦政府の売上げ税からはずす措置をとる、カナダで有線または衛星を通じて再放送される米国製テレビ番組の保護に関する米国の懸念を考慮することに同意し、米国はカナダ製特殊鋼の対米輸出をしやすくする措置をとることに同意した。

### 北米防空網を近代化

両首脳は、合意済みの四つの取決めに署名したが、そのひとつは有人宇宙船計画へのカナダの参加。この計画には、日本や欧州宇宙機関（ＥＳＡ）加盟諸国も加わることになっている。すでに〝カナダーム〟（スペースシャトルに搭載された遠隔操作ロボット）の提供など、長年宇宙開発において米国と協力してきたが、有人宇宙船計画ではサービス棟などの建設を検討している。

第二は、北米航空宇宙防衛軍（ＮＯＲＡＤ）の近代化に関する合意。これは、一九五〇年代、カナダ北方に建設された遠距離早期警戒網（ＤＥＷライン）が老朽化したため、これに代わって、アラスカからカナダ北方にかけて十三の長距離レーダー基地、三十九の短距離レーダー基地からなる北方警戒システム（ＮＷＳ）を設置する、というもの。費用は六対四の割合で米国が多く負担し、カナダが運営・管理する。また、レーダーと地域作戦管理センターをつなぐ通信網、米国内におかれた超地平線後方散乱レーダー（ＯＴＨ―Ｂ）による監視、空中警戒管制機（ＡＷＡＣＳ）によるレーダー監視なども、近代化された北米防空網に含まれる。

第三は太平洋サケ条約。これは、北西太平洋沿岸のサケを協力して管理・保護・増進しようというもので、年間漁獲割当て、地域や時間別の規制、ふ化したサケを他方の漁民が捕獲したときの保障などを定めている。

第四は、犯罪捜査での協力態勢を推進するための、相互司法扶助条約。ただし、公益に反すると考えられる場合は、協力を断ることもできることになっている。

# トロントなどにリニアモーター式軽量快速電車

四月末、埼玉県の新交通システム調査団がトロントを訪れ、同市で三月に営業開始した最新式都市交通システム（トロント～スカボロ間六・五キロ）を視察した。同県で現在進めている中枢都市圏づくりに、新しい交通機関としてカナダの「リニアモーター新交通システム」が、有力候補に上ったためだ。

トロントのこの都市交通システムは、リニアモーター駆動、コンピューター制御・無人運転方式を世界で初めて実用化した都市交通網で、オンタリオ州の都市輸送開発公社（UTDC）が長年かけて開発したもの。

各車両に取り付けられたリニアモーターと線路の中央にある反応板との反発で生じた磁気の力で動くため、振動音が低く、ギアによって起こる騒音の心配もない。日本で開発中の磁気浮上式と違って、車輪で車体を支え、車輪もゴムでなく鉄製、レールも鉄製（ただし継目なし）のため、建設費がかなり安くつく。そのほか車体の軽量化、ステアラブル機構付き台車（きしみ音なし、車両小型化）など、いくつもの改良が施されている。

UTDCではこれを中量旅客輸送システムと呼び（中量とは、地下鉄とバスの中間程度の輸送量）、新時代の都市交通システムの主役のひとつになるものとみている。トロントで一足先に実現したが、ブリティッシュ・コロンビア州でも、バンクーバー市街からニューウェストミンスター間の二十一・四キロの路線が、来年五月にオープンするエキスポ86に間に合うよう建設中である。

バンクーバーでは、この交通機関をとくに新型軽量快速輸送システム（ALRT）と呼び、エクスポ会場のフォールス・クリーク側とバラード入江側を結ぶ"足"に使うほか、バンクーバー博のテーマ「交通」を具現した好例として提示する。この建設プロジェクトには昨年来、日本から交通専門家による視察が相次いでいる。

UTDCは、都市内および都市間交通の渋滞解消に関する研究開発を進めるため、オンタリオ州政府が設立した機関で、軽量快速電車のほか、いくつかの新しい交通技術を開発している。路面電車を近代化した軽量軌道車（LRV）もそのひとつ。これはトロントですでに連結車が黒字営業しているほか、カリフォルニアへも輸出されている。一方、軽量快速電車の技術は、トロント、オシャワ、ピカリング、オークビル、ハミルトン、バンクーバーなどのほか、米デトロイトでも採用が決定している。UTDCの日本総代理店は、住友商事。

エクスポ86の会場となるバンクーバーで建設中のリニアモーターカー。

# 石油・天然ガスの価格を自由化

## 重質油などの開発に弾みか

カナダ連邦政府は、先にニューファンドランド州と石油開発に関する協定を結んだ（既報）のに続いて、三月末、アルバータなど西部三州と石油・天然ガスについて価格規制の撤廃を柱とする協定「ウエスタン・アコード」を締結した。

この協定により、石油と天然ガスの統制価格はそれぞれ六月一日および十一月一日までに撤廃され、また一九八一年の国家エネルギー計画（NEP）に基づく賦課金および税金もすべて削減されることになっている。

賦課金や税金のうち、通常石油と天然ガスに実質一二パーセント、合成石油に八パーセント課されていた石油・天然ガス収入税は、段階的に削減され、一九八八年までには撤廃される。天然ガス・ガス液税および石油追加収入税のほか、暫定措置として導入されていた原油輸出賦課金とカナダ所有特別賦課金も、また外国産の石油を東部諸州に輸入する費用を助成するために西部カナダ産の石油に課されていた石油補てん賦課金も、六月一日には廃止となる。

アルバータ州のオイルサンド開発、大西洋岸の石油開発、財政的に苦しい中小石油生産企業に対しては、特別措置を考慮することになっている。

カーニー・エネルギー大臣は、関係州政府から、連邦政府の政策変更によって生じた企業利益には課税しない、という約束をとりつけた。こうした利益増加分はすべて再投資に振り向けられ、雇用増加を促進するものと期待されている。

さまざまな規制が解除され、税金・賦課金が撤廃されることにより、通常石油の探査・開発、重質原油や瀝青油（ビチュメン）の開発・精製に拍車がかかるものと思われる。また、原油および石油製品の輸出については、これまで国家エネルギー庁の認可が必要だったが、短期契約（軽油と石油製品は一年未満、重質原油は二年未満）に限り認可が不要になったことも、協定の要点のひとつである。

エクスポ・センター。

「ワールド・イン・モーション、ワールド・イン・タッチ」（世界を結ぶ交通と通信）をテーマにしたバンクーバー博覧会（エクスポ86）の開幕が、あと一年後に迫った。参加国は、米国、ソ連、中国、日本など四十近く、参加企業も十数に達し、フォールス・クリークの北岸から西岸にかけての、全長四・二キロ、周囲七十ヘクタールの主会場と、バンクーバーの中心街をはさんで反対側にあるバラード入江の第二会場では、準備もいよいよヤマ場にかかった。

万博が開かれるのは、来年の五月二日から十月十三日まで。バンクーバー市制と大陸横断鉄道の太平洋岸到着の百十周年に当るだけに、来年のバンクーバーは一年を通じて祝賀オンパレードとなる。

# バンクーバー博まであと1年

EXPO 86が開かれるバンクーバー。白い部分が会場（手前、左右に広がるのが主会場、後方が第２会場）。

開幕一年後を控えた五月二日には、万博のメーン・アトラクションのひとつとなるエクスポ・センターが完成した。きらきら輝く、この十七階建てのジオデシックドーム（立体的な格子の組合わせによって、最少の直線部材で作ったドーム）には、劇場や展示ホール、レストランなどが設置されることになっている。

ドームの呼び物は、五百人を収容できる世界最大の「オムニマックス劇場」。オンタリオ州のオムニマックス社が開発した特大のハイファイ映写機によって、普通の三十五ミリ・フイルムの九倍も大きいフイルムで幅二十七メートルの半球形シネラマスコープ・スクリーンに写しだされる映像は、ものすごい臨場感で観客を圧倒してしまう。

もうひとつの、三百二十三人収容の「未来劇場」は、十六のスクリーン、十二台のスピーカーからなるカナダ初の〝観客参加〟劇場。観客が、世界旅行や地球外生物、脳移植といったさまざまなトピックスの中からどれかを選んで、椅子のひじ掛けについているボタンを押すと、最も人気のあったテーマが、レーザーとオーディオビジュアルによってスクリーンに写しだされる仕掛けになっている。

さらに展示場「デザイン二〇〇〇」では、風力自動車からホログラフィー、宇宙服にいたるまで、交通と通信に関するいろいろなものを立体的に見せてくれる。

また、第二会場では、政府館といくつかの企業の展示場を収容する帆船の形をしたカナダ・プレースが、しだいにその姿を現わしてきた。ここでは、六階建ての高さのスクリーンに写しだされる三次元映画が目玉だ。カナダ・プレースは、博覧会終了後、巡航船ターミナル、高級ホテル（東急チェーン）、世界貿易センターなどが入ることになっている。

「ワールド・イン・モーション、ワールド・イン・タッチ」――人類のこれまでの交通と通信におけるさまざまな成果を祝い、将来に向けて知識を広げていこう、というのがエクスポ86の狙いである。

会場では、このテーマ通り、いくつもの先端的な輸送手段が紹介され、また実際に観客の移動に利用される。

例えばフォールス・クリークのメイン会場では、端から端まで、地上五メートルにモノレールが走り、乗客が移動しながら会場全体を見渡せるようになるほか、入江内をフェリーが運行して人々は数百メートルごとに乗降できる。

またフォールス・クリークから第二会場のカナダ・プレースまでは、建設されたばかりの軽量快速電車や高速ホバークラフトが頻繁に往復し、メイン会場では、フィリピンのジープニー、クウェートからきた貿易用帆船、ベニスのゴンドラ、アルバータ州で開発された氷河用の乗物〝テラバス〟など、さまざまな乗物が紹介される。

エクスポ86ではまた、五日間から二週間と時期を区切って、世界の交通と通信のある側面を〝特集〟する。例えば極地の輸送と交通、航空、海洋輸送など。航空特集ではアボッツフォード国際航空ショーの二十五周年行事、海洋輸送特集では世界帆船ショーなども予定されている。

催しものも目白押し。四千五百人収容のエクスポ野外劇場をはじめ、国際円形劇場、国際プラザなどでは、民族舞踊や連邦警察の有名な騎馬ショー、コンサートなどが毎日のように繰り広げられる。

また古代エジプトのラムセス大王（紀元前一二九〇―一二二四）の時代の遺品八十点が展示されるほか、会場外では芸術祭「ワールド・フェスティバル」が開催される。万博期間中続くこの祭典には、カナダをはじめ世界中からアーチストが参加、舞踊や演劇、音楽を約三百回にわたって公演することになっている。

カナダ便り

# ニューファンドランド島 特異な言語情況

丸田忠雄

ニューファンドランド島は、一四九七年、ジョバンニ・カボットにより発見された、北米最東端、大西洋に浮かぶ、北海道よりやや大きな島で、一九四九年、イギリスの植民地からカナダに帰属するまで、その地理的・歴史的事情から、他の北米英語圏から隔離された言語的「飛び地」であった。N島で話される英語は、必然的に、北米大陸で進行した言語的平準化を免れ、多くの古い言語形式を留め、さらにはN島独自の社会的・経済的・民俗的諸要因の影響のもとで非常にユニークな地域方言へと発展してきた。とくに海洋、気象、そして島の主産業である漁業に係わる意味領域には、多くの独自の語彙がみられ、また標準英語と共通の語に対しても独特の語義が与えられている。

この島に本格的な（季節的でない）植民が始まったのは十七世紀後半からで、移民のほとんどが南西イングランド、南西アイルランドからやってきた。現在島の人口五十万の九割以上が、これらの人々の子孫である。セント・ジョーンズ市を中心とするアバロン半島には、アイルランドからの移民が多く（彼らは日本人の目から見ても一般に驚くほど小柄である）、N島北東部にはイングランドからの移民が多い。

必然的に、N島の人々が話す英語にアイルランド英語、イングランド南西部方言の明らかな特徴がみられる。これらに島独自の特徴が加わって、いわゆるN島方言が成り立っている。この他に、N島西部にはスコットランド＝ゲール語やフランス語を話す少数の人びとがいる。さらに現在は消滅してしまったが、かつてはミクマック、イヌイットなどの北米原住民、ノルマン・フレンチを話すイギリス海峡チャネル諸島人（現在人名にその名残りがみられる）も住んでいた。

このようにN島の言語的背景は複雑なのだが、あえてN島方言の最も顕著な特徴を挙げると、発音の不明瞭さ（母音を鼻音化する傾向による）と、信じられないほどの「早口」がある。

典型的なN島人のことばは、英語を母音とするカナダ本土人やアメリカ人も全く理解できず、さらには彼らの話している言語が英語であることさえ感ずることができないという。彼らの舌の転がるリズミカルな音は、何か楽器のすぐれた演奏であるかのように聞こえる。

ただし、教育の普及、都市化、マスメディアの発達、交通事情の改善などの必然的な帰結として、「本当の」N島方言を話す（せる）人口は急速に少なくなってきている。この傾向は、N島人の自分たちの方言に対する態度の変化（誇り→蔑視）により、さらに拍車をかけられている。

このような情況の中で、一九八二年、カーウィン、ストーリー、ウィドウスン共編『ニューファンドランド英語辞典』（トロント大学）が出版された。これは構想から完成までに四半世紀の時間とニューファンドランド＝メモリアル大学の多くの学者・学生の献身的な労力を費した、ニューファンドランド英語の語彙に関する初めての本格的な学術的集大成である。同辞典出版以前にもしばしばN島方言に関する言及はあったが、それらは共通して、カナダで経済的・文化的に最も遅れた地域の住民（今でも一割強の人が文盲）が話す「奇妙」な英語、俗に蔑視的に「ニューフィー英語」としてであった。このような中で、偏見にとらわれない純粋に学問的関心に基づく、しかも第一級の出版社からの辞典の刊行は、N島方言に対する偏見を打ち破ると同時に、N島人に自分たちの言語、さらには自分たちの存在に対する自信回復に大きく寄与した、とカーウィン教授はいう。

だが実情はそれほど単純ではないようだ。確かに、辞典はN島以外の多くの新聞・雑誌で取り上げられ、最大級の賛辞を受けている。しかし、これらの評者は本当のN島人ではない（N島の知識人たちは、自分たちをN島人とは見なしていないようだ）。彼らの書評に一様にみられるのは、同じ島内に、同じ北米に自分たちの言語と著しく異なることばが話されていることへの驚きである。彼らのN島方言に対する視点に、何ら根本的な変化はないのである。また、海や農園で働く多くのN島人たちは、この辞典の存在さえ知らず、たとえ知っていても、「よそ者」が作った本に必ずしも好意的な目を向けているわけではないようだ。

ともあれ、『ニューファンドランド英語辞典』の出版を契機に、ニューファンドランド＝メモリアル大学のN島地域研究は一段と活気を帯びてきたように思われる。民俗・言語・歴史・英語・仏語の各学科を中心に活発な研究活動がみられ、数多くの出版物が刊行されているし、昨年は各分野にまたがる学際的な学術雑誌*Newfoundland Studies*も同大学から発行され、カーウィン教授が停年をまたず退職して、専ら編集にあたっている。

（山形大学人文学部助教授、ニューファンドランド＝メモリアル大学客員研究員）

カナダの首相 ❸ ウィルフリッド・ローリエ
(1896—1911)

# 〝20世紀はカナダの世紀〟

ヨーク大学教授　ジョン・セイウェル

「私の目的は、連邦の強化にある。これまで長い間たがいに疎遠であった各グループをまとめ、ひとつの国民に育て上げること——これは至上目的であって、他の問題はすべてこの目的に従属する。」

## 統一こそわが使命

この言葉は、政治家の空疎なレトリックではない。カナダの八代目首相サー・ウィルフリッド・ローリエが、生涯その指針とした信条を述べたものである。初代首相マクドナルドがカナダに〝肉体〟を与えたのだとすれば、ローリエはその〝魂〟を見つけようとした。自由党の党首を三十二年間、首相を十五年間つとめたローリエは、人種、宗教、地域による分裂に直面しながら、カナダの統一を保つ鍵を探し続けた。時代はカナダが植民地から独立国へと移行していくなかで、対英関係をめぐって国論が割れているときである。

ローリエは、国内統一の任務を遂行するのには最適任者だった。英仏両語に堪能で、英仏どちらの文化にも同じように精通している点では、後のピエール・トルドーと双璧をなしている。モントリオール近在のフランス系測量技師の息子として生まれた彼は、少年の頃、イギリス系の家にあずけられて英語とイギリス系の生活習慣を身につけ、のちにマッギル大学でイギリスの法律、政治理論、歴史を学んだ。

政界に入ったのは、一八七一年、三十歳のとき、ケベック州の州議会に自由党から立候補して当選したのが最初である。三年後に連邦下院に入り、終生下院議員の座を保った。

一八七〇年代は、ケベックの自由党員にとって暗い未来を予見させた。リベラリストにはほとんど共和主義に近い急進派もおり、自由党はカトリック教会からの執拗な批判や攻撃の真只中にあった。ケベックの僧侶たちは、リベラリズムはキリスト教社会につけ入る悪であると喧伝し、自由党支持者には洗礼や終油を拒んだりした。

## 政治は宗教から自由

ローリエは、当時まだ一介の自由党員だったが、こうした頑迷固陋な教会権力に対して敢然と闘いをいどんだ。政治は宗教から自由でなければならない。もし政党が他宗派の存在を認めなければ、さまざまな民族からなるカナダはたちまち宗教戦争に陥ってしまうではないか。

一八七七年にローリエが放った自由主義についての演説は、教会を真っ向から批判し、一大センセーションをまき起こした。聖職者たちは激高したが、結局ローマ法王が政治介入禁止命令を出し、事態は収まった。ローリエは今や自由主義の若きスターであった。一八八七年、彼はエドワード・ブレークの後を継いで自由党党首となる。

一八九一年の選挙で、無制限の対米互恵主義を問うた自由党が負けると、ローリエは自由貿易主義をすて、保護貿易を受け入れた。この結果、産業界の自由党支持が増え、また、ケベック保守党の内紛で穏健派が自由党に鞍替えした。大半の州で自由党が強力な政権をうち立てていたことも、中央での勢力に大きな影響を与えた。

しかしマニトバ学校問題（マニトバ州が一八九〇年、カトリックによる分離学校を廃止し、宗派に関係のない単一の公的学校制度を樹立する法律を制定したことから起きた対立抗争）では、自由党も保守党と同様に分裂の危険にさらされた。ローリエはこの問題について長い間、方針を明らかにせず、事態を見守った。一八九五年になってようやく、イソップ寓話の北風と太陽にならって「私なら太陽のやり方をとる」と表明した。中央の強権行使によってではなく、教育に対する州権を認めた上で、州と話し合いをする方式を選んだのである。翌年の選挙で、太陽方式を掲げた自由党は各州で保守党を破り、心配されたケベック州でも勝利をかち取った。

フランス系最初の首相が、こうして誕生した。

## フランス系最初の首相

ローリエは、マクドナルドと同様、断固としたワンマンであったが、人に好かれる天性を持ち合わせていた。優雅な話し方、格調高い演説、筋の通った議論、人を動かす理想——ローリエはまさに天

才的政治家であった。

彼は無慈悲に自分の意向を貫くこともあったが、他方、説得と妥協の術を何よりも重視した。妥協は、内部に対立を抱える国にとって、統一を守る鍵であった。彼の絶えざる妥協が批判の的になったとき、彼はこう説得した。

「我々の存在自体が変則なのだ。我々は英国臣民であると同時に、自治国でもある。カナダは多州に分かれ、多民族に分かれている。こうした国で船を安全に進めるには、純粋理想主義の政策よりも、むしろ国のあらゆるセクションに訴える政策の方がいい。」

## 経済的飛躍の時代

ローリエは、幸運に恵まれていた。長い不況もようやく終わりを告げ、世界経済は再び活気を取り戻しつつあった。米国のフロンティアが開拓しつくされ、大勢の移民がカナダ西部へ殺到した。オンタリオ州やケベック州の北部に、あるいはBC州の山岳地帯に、鉱山や精錬所や、木材切り出しキャンプや、紙パルプ工場の町が次々と作られていった。州は、町や工場に電力を供給し、カナダは急速に工業国となりつつあった。カナダの産業は保護関税に守られて成長し、また、一次大戦前の十数年間に二倍にふくれ上ったカナダ市場を狙って、米国資本が次々と工場をカナダに設立した。人びとは楽観的になり、大陸横断鉄道も二本に増えた。ローリエは、「二十世紀はカナダの世紀」と豪語した。

しかし、物質的な繁栄だけで国の統一が保てるわけではない。マニトバ学校問題がローリエの妥協策で何とか収拾されたのもつかの間、対英関係をめぐって、また新たな問題が起こった。

当時のイギリスは、キプリングの詩に見られるように大英帝国の繁栄を謳歌し、帝国主義の意気盛んな時代であった。ジョセフ・チェンバレンは、英国と植民地の結合を強化して帝国連合（共通の貿易規制や統一軍事計画を可能にする連合）を作ろうとしていた。イギリス系カナダ人は、英国のこの帝国フィーバーに共感を寄せ、一方、フランス系カナダ人は反感を抱いていた。

## 完全な独立国めざして

ローリエは、イギリスの諸制度を讃美し、英帝国の偉大さを口にしたが、実際は心底カナダ人であり、ナショナリストであった。英国の指揮下に植民地政府の代表が一堂に会する英帝国会議で、彼はいつも巧みな議論でカナダの利益を主張したが、言葉以上に行動でもイギリスの押しつけを拒んだ。将来の完全独立を不可能にする帝国連合よりは、現在の自治領の地位の方を選んだのである。なぜなら、帝国連合内部での対等性、平等性など、彼には信じられなかったからだ。

一八九九年、南アフリカに起こったボーア戦争は、ローリエに対する仏系カナダ人の不信感を顕在化させた。英系カナダ人は、カナダが派兵してイギリス軍を支援すべきだと主張し、仏系カナダ人はこぞってこれに反対した。ローリエは結局、部隊を派遣しはするが、志願兵に限る、という妥協策を講じた。仏系はこの方策を大いに不満とし、ローリエの妥協主義は、常に仏系カナダ人に犠牲を強いるものだ――という感情が仏系の人々の間に流れた。

第一次世界大戦は、英仏系の亀裂をさらに深めた。ドイツの海軍増強に脅威を感じた英本国政府は、植民地に対し、戦艦建造費の一部負担を要求してきた。ローリエはそれを断り、代わりにカナダ海軍の創設を提案、英国が有事の際に派遣すればよいとして、海軍法案を上程した。保守党はローリエを（英帝国への）反逆者と呼び、フランス系のボーラサはボーラサで、イギリスのために戦う「おもちゃの海軍」は無意味である、ローリエたのむに足らず、と非難した。

ボーア戦争へのカナダの参加は、英仏系間の対立を一層深めた。カナダの派兵を主張する英系紙モントリオール・スター（1899年10月7日付）は、平和時（女王在位50周年－左）と戦時（右）のローリエを並べて、ボーア戦争に消極的な首相を皮肉った。

海軍問題で議論が沸いていたちょうどその頃、ローリエは対米貿易政策でも大きな転換を図ろうとしている。当時、好況とはいえ、その恩恵は国民各層に等しく及んだわけではなかった。農民や一次産業従事者は高い工業製品を買わされ、またアメリカ市場への産品輸出も不利だったため、保護関税に不満を抱いていた。

一九一〇年、これまでカナダの互恵要求を一切退けてきたアメリカ側から、初めて互恵協定の申し入れがあった。ローリエはこれを推進しようとしたが、銀行家、製造業者、小売業者、鉄道業者が猛然と反対し、保守党がこれに唱和した。互恵主義はカナダへの反逆であり、ローリエはヤンキー製品を買うために国の独立を売り渡そうとする売国奴だ――というのである。

ローリエは、総選挙で国民の賛否を問うた。こうして行なわれた一九一一年の選挙で、彼は完敗を喫し、政権は保守党のボーデンに渡る。選挙をふりかえって彼は述懐している。「私はケベックのフランス系とオンタリオのイギリス系の両方から裏切り者と思われている。ケベックでは国家主義者、帝国主義者といわれ、オンタリオでは（英国からの）分離主義者、反帝国主義者と非難されている。だが実際はどっちでもないのだ。私はカナダ人以外の何者でもない。」

ローリエは、野党となった自由党を率いて一九一七年に再び政権に挑戦するが、またも敗退。一九一九年二月、党首のまま七十七年間の生涯を閉じた。

# 各地の新聞から

## 日本でもガン予防マラソン 友の会が企画、代表はカナダへ

ガン患者と家族に生きる希望を与えようと、「ガン予防チャリティー・マラソン」の企画が、ガン予防友の会の手で進められている。

片足をガンで奪われ、義足でカナダを数千キロ走り抜いた青年の人生ドラマを描いた映画「テリー・フォックス物語」を、テレビビデオ化するための資金集めがきっかけ。マラソンにはガン患者やその家族も参加する。

計画によると、四月に大分市舞鶴町、五月に大阪、六月十六日には東京、八月四日には北海道で実施する。

参加したガン患者の中から、九月二十九日カナダで開かれる「テリー・フォックス・ラン」への代表選手を選ぶ。

問い合わせ先は、東京都豊島区南大塚三―十一―五、小林荘内、ガン予防チャリティ・マラソン実行委員会。電話（〇三）九八〇―四六三九。

（四国新聞、三月十五日）

## 牛久町とホワイトホース 万博会場で姉妹都市調印

末長い友好と交歓で世界の調和と平和を――。（茨城県）稲敷郡牛久町と、カナダ・ユーコン準州の首都ホワイトホース市の姉妹都市提携調印式が四月十九日、科学万博会場カナダ館で行われた。

両市町の友好関係は、同町内の大型スーパーで行われたカナダ展を記念する同国の木「メイプルツリー」の植樹をキッカケとして深まり、昨年二月には、ブラニガン市長が牛久町を訪れた。「ワインと湖の町」と「森と湖の市」の交流はその後、急速に進行、科学万博開催時期の意義ある調印となった。

（いはらき、四月二〇日）

## アイヌとインディアン 友好同盟協定に調印

カナダ・インディアンとの文化交流を目的に札幌アイヌ文化協会（豊川重雄会長）が派遣した「アイヌ民族とカナダ・インディアンとの国際交流団」（団長・沢井アク同協会常務理事など十二人）が三月三十一日夜、帰道した。同団はカナダ西海岸の二カ所のインディアン居留地を訪れ、カナダ政府のインディアン対策の実情をつぶさに見たほか、「アイヌとインディアンの友好同盟協定書」に調印、来年度からの交換留学も取り決めた。

カナダ・インディアンとアイヌとの交流は、これまでも個人、団体間で何度か行われているが、その成果が「協定書」の調印という形で実を結んだのは初めて。

（北海道新聞、四月二日）

カナダで交歓するアイヌとインディアン。

## カナダのカワウソが死亡 千葉市の動物公園で

四月二十八日オープンした千葉市動物公園に、昨年十一月中旬、姉妹都市関係にあるカナダ・ノースバンクーバー市から「アンバサダー」（親善大使）として贈られたカナダ・カワウソのペアのうち、メスの「マリーン」（三歳）が子宮ガンで急死した。

死んだ「マリーン」は、体長一㍍、体重七・六㌔。昨年十一月十七日、オスの「アンディ」と一緒に来日して以来、特製のカワウソ舎内でスイスイ泳ぐなど、元気な姿を見せていた。

（読売新聞、四月十二日）

## 江ノ島水族館にラッコ バンクーバーから到着

カナダのバンクーバー市立水族館から藤沢市片瀬海岸の江ノ島水族館に（三月）二十六日、海の珍獣「ラッコ」＝オス、一歳＝二頭が着き、二十九日一般公開される。二頭はバンクーバー市立水族館生まれ。ラッコは現在、日本には三重県の鳥羽水族館など四館で飼育されているが、水族館生まれは今回が初めて。江ノ島水族館は返礼としてタカアシガニを贈る。

（毎日新聞川崎版、三月十九日）

## 編集後記

●日本からカナダを訪れる人々の大半は、夏に集中しています。カナダの夏は、厳しい冬から解放された喜びで、躍動感がみなぎっているからでしょうか。多くの方々が、名所見物の合い間に、ハイキングやゴルフを楽しんでいるようです。キャンプや釣り、ゴルフといった、アウトドア・ライフを目的としたツアーも誕生しましたし、中にはバードウォッチングやカヌー乗りにでかける人もいます。五月末には、村山雅美・元南極越冬隊長をリーダーに、北極圏旅行団がカナダへ出発しました。

●今月は、このカナダの夏に焦点を当ててみました。カナダの冬について書いてもらったことのある時事通信のトロント特派員・平山氏には、カナダ人の夏の生活風景を、数年前から中高校生を率いてカナダで教育キャンプを開いている谷川哲夫氏には、いくつかのキャンプ場の様子を書いていただきました。「北極の夏」について寄稿をお願いした岩下氏は、カナダの極地を何度も訪ねているベテランです。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部